

アイデンティティ形成の分析枠の研究

—Identity と intimacy の視点から—

東京大学教育社会学研究室 大 野 道 夫

The study of analytical framework of Identity construction

—From the viewpoint of Identity and intimacy—

Michio OHNO

When we study modern youth from the viewpoint of Identity construction, there are two problems. First, a period of youth is longer and longer, second, we must turn our attention to the mutuality of Identity.

So, this paper constructs analytical framework of Identity construction from the viewpoint of Identity and intimacy, and analyses highschool student and university student.

はじめに・問題の設定

「青年の異議申立て」以来、「青い鳥症候群」¹⁾「ピーターパン・シンドローム」²⁾「やさしさの世代」³⁾など現代青年⁴⁾の特徴をとらえるために、さまざまな概念が生まれた。それら多様な概念は、大きく二つのグループに分けられる。一つは、大人になろうとせず「青い鳥」を追いもとめる青年や、永遠の青年である「ピーター・パン」のように、引き延ばされた青年期を強調するものであり、もう一つは、そのような青年期のなかで仲間集団内の「やさしさ」をもとめ、仲間との情緒的な関係を重視する傾向を示すものである。

この二つの側面については教育社会学においても、これまでいくつかの考察がなされてきた。たとえば二関隆美は引き延ばされた青年期について、第二次性徴で始まり社会文化的成熟で終る青年期が、文化が複雑高度化した現代社会では長期化する傾向があることを指摘している⁵⁾。この傾向は、K・ケニストンの後期青年期としてのユース (youth) 期の研究や⁶⁾、D・マッツアのユース期の課題の継続性の研究⁷⁾などにも指摘され、文化の複雑高度化が、発達課題を複雑高度化させ、それが青年期の終了期の延長化と曖昧化をもたらすことが示されている。

また引き延ばされた青年期の存在については実証的な研究もあり、たとえば松原治郎は、青年意識調査から、

「まだおとなだと思っていない」青年が、18~22歳で40.5%、23~27歳でも19.6%存在することを指摘し、現代青年の「おとなになる」ことを拒否する生き方を示している⁸⁾。

次に、仲間との情緒的な関係の重視については、やはり二関が、現代青年文化の特性として、ロマンティズムと感性主義、小集団内での情緒的な凝集性のたかさをあげている⁹⁾。そしてこの傾向は社会調査にもみられ、たとえばNHKの調査において、「身近な人たちと、なごやかな毎日を送る」という〈愛〉志向の存在が示されている¹⁰⁾。

以上のように現代青年の特性として、引き延ばされた青年期の存在と、そのなかにおける仲間との情緒的な関係の重視をみた。ところでこの現代青年を、アイデンティティ (Identity) やモラトリアム (moratorium) という概念で分析しようとする試みがある。その代表として小此木啓吾は、現代青年を「モラトリアム青年」とよび、その心理的特徴として、全能感、解放、遊び感覚、隔たり (局外者)、自我分裂、無意欲、しらけなどをあげている¹¹⁾、そしてこの「モラトリアム青年」の指摘は、その後さまざまな青年の分析にとりあげられてきたが、アイデンティティやモラトリアム自体はE・H・エリクソンの青年期研究の概念である。エリクソンは青年期の発達課題として、それまでの同一化 (identification) を選択し、新しく配置し直すことによって成立する、首尾一貫した統一体であるアイデンティティ (Identity) の獲得、

を示している。そしてアイデンティティの獲得の重要な要素の一つとして、社会が行動の自由を選択的に許容し、青年が挑発的な遊戯的行動をおこなう時期としての、心理社会的なモラトリアム (psychosocial moratorium) の存在も示している¹²⁾。

しかし現代青年を、アイデンティティの形成とそのための猶予期間としてのモラトリアムという Identity—moratorium の軸のみで分析することは、以下の二つの理由により、必ずしも適切とはいえない。

その第一は、前述のような引き延ばされた青年期の存在である。エリクソンは青年期 (adolescence) の年齢幅を明確に定義していないが、『幼児期と社会』当時の社会状況 (1950年前後) を考えるなら、G・S・ホールの青春期 (adolescence) 同様に、かなり短期間の青年期を想定している、と考えられる。したがって現代の引き延ばされた青年期を分析する場合、エリクソンの青年期 (adolescence) の Identity—moratorium の軸のみでは不十分であり、長期化された青年期に対応する新しい軸が要請される。

またその第二は、やはり前述した仲間との情緒的な関係の存在である。多くの論者が指摘しているようにエリクソンのアイデンティティ概念は、自我の統合力、主体としてのアイデンティティである自己アイデンティティ (ego Identity) を中心としている¹³⁾。またエリクソンの青年期の基本的徳目 (basic virtue) は、イデオロギ

ーへの忠誠 (fidelity) だが、これもエリクソンが一つの対象への、一貫した主体的帰依 (commitment) を重視していることを示している。しかし現代青年には、仲間との情緒的な関係の重視、さらに「物的生産」を原理とする産業社会から「人間相互間のゲーム」を原理とする脱産業社会への移行にともなう「柔らかい個人主義」の出現¹⁴⁾、などが存在している。したがって、他者との多様な関係を中心とする、客体としてのアイデンティティである自己アイデンティティ (self Identity) に視点をうつした、新しいアイデンティティ形成の類型も模索する必要がある。

したがって本稿は、

1 アイデンティティ論を中心にエリクソンの発達図式を批判的に検討し、現代青年のアイデンティティ形成を分析する新しい分析枠を示す。

2 この分析枠をもちい、実際に高校生と大学生を、学年による変化、アイデンティティ形成の規定要因、時間的展望との関係、について分析する。

ことを課題にする。

I 章 エリクソンの発達図式の批判的検討

A アイデンティティ論と歴史的状況

エリクソンの研究は、S・フロイトの自我心理学を基礎としており、アイデンティティという概念も、フロイ

8 成熟期								統合 絶望
7 成人期 (adulthood)							生殖性 停滞	(genera- tivity)
6 初期成人期 (young adult)						親密さ 孤立	(intimacy)	
5 青年期 (adolescence)					アイデンティティ アイデンティティ 拡散	(Identity)		
4 学童期				勤勉さ 劣等感				
3 遊戯期			自主性 罪悪感					
2 早期幼児期		自律性 恥, 疑惑						
1 乳児期	信頼 不信							

図 1 エリクソンの発達図式

トの内的同一性 (der innern Identitat) という概念が起源となっている。そしてエリクソンは、フロイトの、口唇期、肛門期、エディプス期、潜在期、性器期という発達図式を、青年期以降の発達をふくめて時間的に発展させ、さらに心理社会的な関係もふくめて空間的にも発展させ、図1のような8段階の発達図式を提示している。このなかでアイデンティティの獲得は、第5段階である青年期の発達課題であり、そのためのモラトリアムの期間と、「発達が何とかなされねばならないときの、必要不可欠の転回点や決定的瞬間」¹⁵⁾としてのアイデンティティ危機 (Identity crisis) が、アイデンティティの獲得の重要な要素とされている。そして、この危機をとらしたアイデンティティの獲得という視点は、1960年代末の「青年の異議申立て」という社会変動の時期に大きな影響力を持ち、K・ケニストンのヤング・ラディカルズの研究をはじめとする多くの青年研究が生み出された¹⁶⁾。

しかしその後社会が安定期に入ると、前述のような引き延ばされた青年期のなかで、仲間との情緒的な関係を重視する青年が出現し、アイデンティティ危機やアイデンティティの獲得が問題にされることが少なくなってくる。この現象は、文化が複雑高度化した先進国共通の現象であろうが、失業、非行、薬物などの社会問題が相対的に少なく、ある程度の豊かさが維持されている日本において、特に顕在化されている。

そしてこのような状態においては、前述のように Identity-moratorium の軸のみで青年期を分析することは、必ずしも適切とはいえない。この点について青年期を分析するその他の概念として、R・J・リフトンの「プロテウスの人間」という概念がある¹⁷⁾。しかしこの「終わりのない実験と探究の連続」をくりかえす「プロテウスの人間」は、単に青年の事例を示すことに終っており、概念としての整理がおこなわれていない。

また教育心理学の分野では、アイデンティティの研究がすすんでいるが、これはJ・E・マーシアの同一性地位についての被験者との面接による分析¹⁸⁾、さらに中年期のアイデンティティの分析¹⁹⁾、などであり、教育社会学における青年期の研究にそのまま応用することはできない。したがって次に、現代青年のアイデンティティ形成の新しい分析枠を作るために、エリクソンの発達図式の検討をおこなうことにしたい。

B エリクソンの発達段階の問題

前述したようにアイデンティティ形成は、エリクソンの発達段階の第5段階にあたる。しかしエリクソンが述べているようにアイデンティティ形成自体は生涯続く発

達過程であり²⁰⁾、さらに以下の二つの理由により、現代青年を分析する場合、第5段階の青年期 (adolescence) だけでなく、第6段階の初期成人期 (young adult) の検討も必要となってくる。

その第一は、エリクソンの発達図式の特徴としての漸成原理 (epigenetic principle) の存在である。この漸成原理は、epi は upon, genesis は emrgence を意味し、ある段階の上に次の段階が発達し、前の発達段階の影響を受けることを示している。したがって発達の第5段階である青年期は、第6段階の初期成人期と強く結びついている、ということができる。またその第二は、青年期の延長という現象である。前述したようにエリクソンは青年期をかなり短期間に想定している。したがって現代の長期化した青年期を分析する場合、発達の第5段階である青年期のみをもちいるのは不十分であり、その次の段階である初期成人期ももちいることが必要になってくる。

以上のように、現代の青年期を分析する場合、第5段階の青年期だけでなく、第6段階の初期成人期も検討する必要性をみた。次に第6段階の初期成人期の検討をおこなう前に、近年、重要なエリクソン研究が展開されている、第7段階の成人期 (adulthood) の研究を概観することにしたい。

最近のエリクソン研究の系譜をみると、そこに成人期の発達課題である generativity にかんする研究がある。まず片瀬一男は、エリクソンの発達図式において、青年期以降の社会化である二次的の社会化に着目し、成人期の発達課題である generativity は、従来「生殖性」と訳されているように「子どもを生むこと」のみを意味するのではなく、次の世代との相互性 (mutuality) をつうじ、相互に社会化されることを意味している、と指摘している。そしてその例として、『ガンディーの真理』において青年たちが、ガンディーと出会うことによって自らのアイデンティティを確立し、また成人期のガンディーも、青年たちと出会うことによって二次的の社会化をとげたところを指摘している²¹⁾。

また柳沢昌一は、以前から青年期のアイデンティティ形成における、他のアイデンティティとの相互性の重要性を指摘していたが、特に世代のサイクルとの関連で成人期の generativity に着目し、世代間の互いの成長を支え合う相互性の源泉としての generativity の重要性を指摘している²²⁾。

このように日本におけるエリクソン研究の系譜のなかで、成人期の generativity に着目した研究がすすんでいるが、これらの研究の重要な点は、以下の2点である

第一に、異なるアイデンティティ間の、相互性の重要性を指摘したことである。この互いのアイデンティティ形成を支え合う相互性は、従来の、自我の統合力、主体としての側面を中心としたアイデンティティ解釈にたいし、さまざまな他者との関係、客体としての側面を重視し、また青年期における一貫性を持つアイデンティティの確立にたいし、青年期以降の二次的社会的化におけるアイデンティティの可変性を強調している。

また第二に、特に成人期において「生殖性」と訳され性的な意味に限定されがちであった generativity に、世代間の相互性という社会的意味を強調したことも重要である。

以上のように発達第7段階である成人期の研究を概観した。次にこれをもとに発達第6段階の初期成人期の検討をおこなうことにしたい。

まず初期成人期の発達課題である intimacy も「親密さ」と訳され、性的な関係の意味に限定されて解釈される傾向がある。しかしエリクソンが「性的な intimacy は、私が考えているもののほんの一部分である」²³⁾と指摘しているように、intimacy も社会的意味をふくんで解釈する必要がある。そしてエリクソンは intimacy を「自分の何かを失いつつあるのではないかという恐れなしに、自分のアイデンティティとほかのだれかのアイデンティティとを融合する能力」²⁴⁾と説明している。したがって intimacy は、自己のアイデンティティを失うことなしに他のアイデンティティと相互性を確立する能力と、解釈することができる。また intimacy の対概念である isolation (孤立) は、他のアイデンティティとの intimacy を形成できない状態であり、相互性が欠如し、孤立した状態として解釈することができる。

C アイデンティティ形成の分析枠の作製

以上のようにエリクソンの発達図式を検討し、現代の引き延ばされた青年期を分析する場合、第6段階である初期成人期ももちいる必要があること、また初期成人期の発達課題である intimacy は、相互性という社会的意味をふくんで解釈する必要があること、を示した。次にこれらの検討をもとに、現代青年のアイデンティティ形成の分析枠を作ることにした。

前述のようにエリクソンの発達図式は、前の発達段階の上に次の発達段階が発生する、漸成原理を特徴としている。したがって、まず青年期の Identity—moratorium の軸 (X軸) を設定し、次に初期成人期の intimacy— isolation の軸 (Y軸) を設定して直交させ、図2のようなアイデンティティ形成の分析枠と四つの類

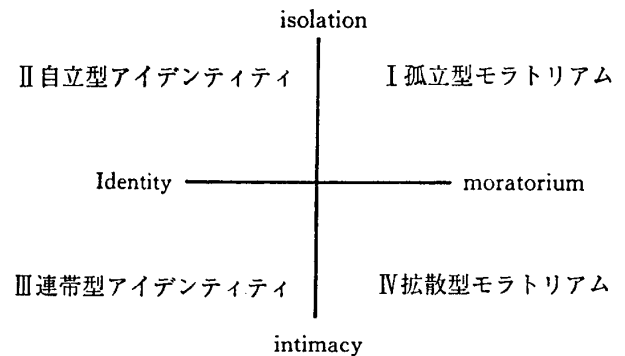


図2 アイデンティティ形成の分析枠

型を作ることができる。

まず第I象限は、アイデンティティが形成されず、さらに intimacy も形成されずに isolation (孤立) の状態にあり、孤立型モラトリアムとよぶことができる。この孤立型モラトリアムは、アイデンティティが未形成で他のアイデンティティとの相互性も形成できず、病理的な形態としては登校拒否、引き籠り (withdrawal) などが考えられ、現代の引き延ばされた青年期のなかではかなり初期の類型として考えることができる。

次に第II象限は、アイデンティティは形成されているが intimacy は形成されていない状態であり、自立型アイデンティティとよぶことができる。この自立型アイデンティティは、青年期 (adolescence) の Identity—moratorium の軸ではアイデンティティが形成された状態といえる。しかし初期成人期 (young adult) の intimacy— isolation の軸も導入すると、他のアイデンティティとの相互性は形成されておらず、自我の統合的機能によってアイデンティティは形成されているが、二次的社会的化における intimacy の形成が欠如している、といえる。

また第III象限は、アイデンティティは形成され、さらに intimacy も形成されている状態であり、連帯型アイデンティティ²⁵⁾とよぶことができる。この連帯型アイデンティティは

- 1 現代の引き延ばされた青年期のなかで青年期のアイデンティティ形成と、初期成人期の intimacy 形成という、二つの発達課題が達成されていること
 - 2 前述のような「人間相互のゲーム」が原理となり、仲間との情緒的な関係が重視されるなかで、他のアイデンティティとの相互性が形成されていること
- により、現代青年のアイデンティティ形成における重要な類型、といえる。

最後に第IV象限は、intimacy は形成されているがアイ

デンティティは形成されていない状態であり、一見すると発達段階の順序と矛盾する。しかしエリクソンは intimacy の説明のなかで、アイデンティティの潜在的な脆弱性が存在する場合、他者との融合がアイデンティティ拡散 (Identity diffusion) におちいる危険性を指摘している²⁶⁾。したがって intimacy は形成されているがアイデンティティは形成されていない第IV象限は、アイデンティティ拡散の状態ということができ、病理的な形態としては自我分裂 (ego diffusion) などが考えられ、拡散型モラトリウムとよぶことができる。この類型は、intimacy の形成が、アイデンティティ形成を促進するのか、それともアイデンティティ拡散におちいるのか、という点で、連帯型アイデンティティと相違がある。

以上のように現代青年のアイデンティティ形成の分析枠を設定し、そこに、孤立型モラトリウム、自立型アイデンティティ、連帯型アイデンティティ、拡散型モラトリウムの四類型をみた。次章ではこの分析枠をもちいて、実際に高校生、大学生の分析をおこない、現代青年のアイデンティティ形成の特性について、いくつかの知見を得ることにしたい。

II章 アイデンティティ形成の分析枠による高校生・大学生の分析

A アイデンティティ形成の分析枠の設定

本章におけるアイデンティティ形成の分析枠の設定は、1986年11月～87年1月に、首都圏、山形、名古屋、広島、福岡の5地点で、大学・短大の学生(847名)と、そこに進学する高校生(2366名)を対象とした、『若者文化』調査²⁷⁾によっている。

まず調査対象の高校生・大学生に、表1のような、青年の発達とアイデンティティ形成に関連する15の質問をおこなった。そして次に、アイデンティティ形成の分析枠を設定するため質問を数量化Ⅲ類にかけ、それぞれの軸を析出させた。

まず第I軸(相関係数0.4577)は、表2に示されるように、プラス方向に「話しあえる仲間がない」(1.81)、「仲間とやりとげた経験がない」(1.52)、「人生の目的がない」(1.35)などがあり、マイナスの方向に「一人前の人間として認められている」(-1.68)、「自分の考えをはっきり言える」(-1.61)、「男(女)らしいと思う」(-1.57)などがあった。この第I軸は、青年の発達とアイデンティティ形成に関連する質問において、すべてプラス方向に質問がかかわる否定型(～がない)があり、逆にマイナス方向に質問がかかわる肯定型(～がある)

表1 青年の発達とアイデンティティ形成に関する質問(%)

		全体	高校生	大学生
A. 趣味でこれだけは人に負けないものがある	1.はい	41.9	42.8	39.3
	2.いいえ	57.9	56.9	60.6
B. 勉強でこれだけはやりとげた経験がある	1.はい	45.3	43.0	51.7
	2.いいえ	54.5	56.7	48.1
C. 仲間といっしょにやりとげた経験がある	1.はい	65.6	62.5	73.8
	2.いいえ	34.2	37.2	26.1
D. 悩んだあげく眠れなかったことがある	1.はい	27.5	22.9	40.4
	2.いいえ	72.3	76.9	59.4
E. 高校に入学してから泣いたことがある	1.はい	50.8	41.5	76.7
	2.いいえ	48.9	58.2	22.9
F. 友だちと考えが対立して、論争をしたことがある	1.はい	57.8	54.5	67.2
	2.いいえ	42.0	45.3	32.7
G. 特定の異性を本気で好きになったことがある	1.はい	60.0	54.5	75.2
	2.いいえ	39.1	44.4	24.3
H. 人生についての目的をもっている	1.はい	54.2	52.2	59.6
	2.いいえ	45.3	47.3	39.8
I. もう一度生まれかわっても、今の自分になりたい	1.はい	32.3	32.2	32.6
	2.いいえ	67.1	67.1	67.2
J. 自分は男らしい(女らしい)人間だと思う	1.はい	30.0	29.5	31.4
	2.いいえ	69.1	69.4	68.0
K. 自分の考えをはっきり言うことができる	1.はい	33.3	32.2	36.5
	2.いいえ	66.2	67.2	63.3
L. どのような職業についてか決めている	1.はい	46.6	45.4	49.8
	2.いいえ	52.8	53.9	50.0
M. なんでも話しあえる仲間がいる	1.はい	75.6	71.6	86.6
	2.いいえ	23.9	27.8	13.2
N. 一人前の人間として認められている	1.はい	31.2	29.5	35.9
	2.いいえ	67.6	69.2	63.3
O. 社会問題について、自分の考えをもっている	1.はい	48.4	48.5	48.2
	2.いいえ	50.8	50.7	51.1

があり、かなり明確に moratorium—Identity を分ける軸として定義することができる。

次に第II軸(相関係数0.3177)は、表3に示されるように、プラス方向に「男(女)らしいと思う」(2.30)、「泣いたことがない」(2.03)、「生まれかわっても今の自分になりたい」(1.88)があり、マイナス方向に「悩んで眠れなかったことがある」(-2.27)、「泣いたことが

表2 Identity-moratoriumの軸

moratorium		I軸 (相関係数0.4577)	
		M. 話しあえる仲間がいない	1.81
		C. 仲間とやりとげた経験がない	1.52
		H. 人生の目的がない	1.35
		G. 異性を本気で好きになったことがない	1.19
		O. 社会的な問題に自分の考えをもっていない	1.08
		F. 論争したことがない	1.04
		B. 勉強をやりとげた経験がない	0.93
		L. 職業を決めていない	0.87
		A. 人に負けない趣味がない	0.83
		K. 自分の考えをはっきり言えない	0.80
		N. 一人前の人間として認められていない	0.78
		E. 泣いたことがない	0.69
		J. 男(女)らしいと思わない	0.68
		I. 生まれかわったら今の自分になりたくない	0.63
		D. 悩んで眠れなかったことはない	0.41
		M. 話しあえる仲間がいる	-0.58
		E. 泣いたことがある	-0.66
		F. 論争をしたことがある	-0.75
		G. 異性を本気で好きになったことがある	-0.78
		C. 仲間とやりとげた経験がある	-0.79
		L. 職業を決めている	-0.99
		D. 悩んで眠れなかったことがある	-1.08
		B. 勉強をやりとげた経験がある	-1.12
		H. 人生の目的をもっている	-1.14
		O. 社会的な問題に自分の考えをもつ	-1.14
		A. 人に負けない趣味がある	-1.17
		I. 生まれかわっても今の自分になりたい	-1.34
		J. 男(女)らしいと思う	-1.57
		K. 自分の考えをはっきり言える	-1.61
		N. 一人前の人間として認められている	-1.68
	Identity		

表3 intimacy-isolationの軸

isolation		II軸 (相関係数0.3177)	
		I. 男(女)らしいと思う	2.30
		E. 泣いたことがない	2.03
		I. 生まれかわっても今の自分になりたい	1.88
		G. 異性を本気で好きになったことがない	1.51
		K. 自分の考えをはっきり言える	1.28
		N. 一人前の人間として認められている	1.25
		M. 話しあえる仲間がいない	1.03
		F. 論争したことがない	0.99
		C. 仲間とやりとげた経験がない	0.98
		D. 悩んで眠れなかったことがない	0.86
		O. 社会的な問題に自分の考えをもつ	0.64
		A. 人に負けない趣味がある	0.44
		B. 勉強をやりとげた経験がない	0.25
		H. 人生の目的をもっている	0.02
		L. 職業を決めていない	0.01
		L. 職業を決めている	-0.01
		H. 人生の目的をもっていない	-0.03
		B. 勉強をやりとげた経験がある	-0.31
		A. 人に負けない趣味がない	-0.32
		M. 話しあえる仲間がいる	-0.33
		C. 仲間とやりとげた経験がある	-0.51
		N. 一人前の人間として認められていない	-0.58
		O. 社会的な問題に自分の考えをもっていない	-0.61
		K. 自分の考えをはっきり言えない	-0.64
		F. 論争をしたことがある	-0.71
		I. 生まれかわったら今の自分になりたくない	-0.89
		J. 男(女)らしいと思わない	-0.99
		G. 異性を本気で好きになったことがある	-0.99
		E. 泣いたことがある	-1.93
		D. 悩んで眠れなかったことがある	-2.27
	intimacy		

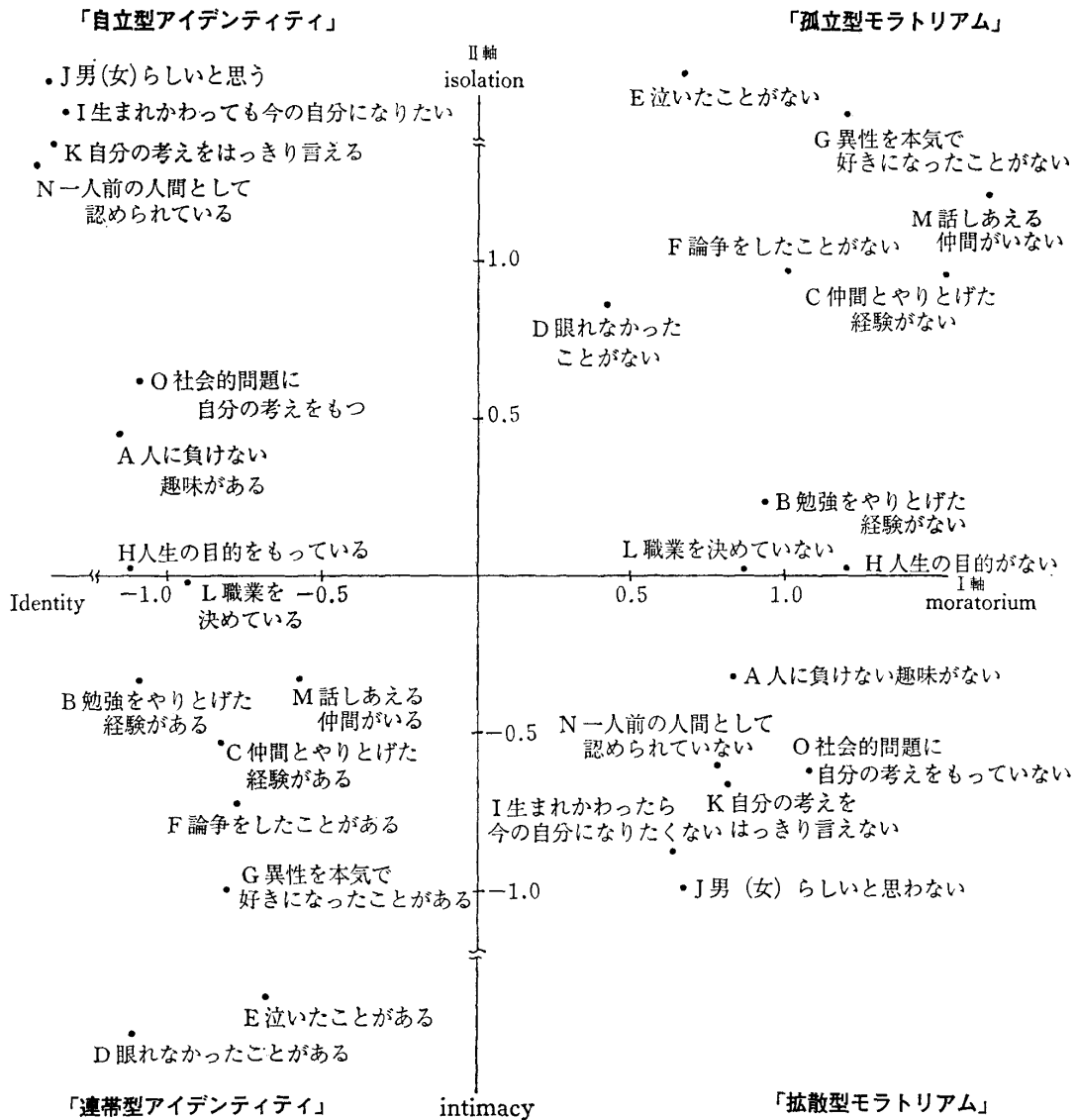


図3 アイデンティティ形成の分析枠

ある」(-1.93), 「異性を本気で好きになったことがある」(-0.99)があった。このプラス方向は, 他にも「異性を本気で好きになったことがない」などがあり, 「泣く」「異性を好きになる」などの情緒的な関係よりも「男(女)らしい」「今の自分」などの自我の統合力を重視している。そしてそれにたいしてマイナス方向は, 他にも「男(女)らしいと思わない」などがあり, 「男(女)らしさ」よりも「泣く」「異性を好きになる」などの情緒的な関係を重視している。

このように第II軸は, プラス方向が相互性の欠如を示す isolation を, そしてマイナス方向が相互性を示す intimacyをそれぞれあらわしており, isolation-intimacy を分ける軸として定義することができる。

以上のように15の質問を数量化III類にかけ, moratorium-Identity の軸(第I軸), isolation-intimacy の

軸(第II軸)を析出した²⁸⁾。(なお, この第I軸, 第II軸は, 高校生・大学生別でも析出された。また第III軸の説明は省略した。)次にアイデンティティ形成の分析枠を設定するために第I軸と第II軸を直交させて質問をプロットすると, 図3のようになる。

まず第I象限は, moratorium 状態で isolation である孤立型モラトリアムであり, 「異性を本気で好きになったことがない」「泣いたことがない」「話しあえる仲間がない」など, 相互性の欠如を示す質問がそれを代表している。次に第II象限は, Identity は形成されるが isolation である自立型アイデンティティであり, 「男(女)らしいと思う」「生まれかわっても今の自分になりたい」「自分の考えをはっきり言える」など, 自我の統合力を示す質問がそれを代表している。そして第III象限は, Identity が形成され intimacy も形成されている

連帯型アイデンティティであり、「眠れなかったことがある」「泣いたことがある」「異性を本気で好きになったことがある」など、アイデンティティ危機の経験や相互性を示す質問がそれを代表している。最後に第IV象限は、moratorium 状態で intimacy である拡散型モラトリアムであり、「生まれかわったら、今の自分になりたくない」「男(女)らしいと思わない」「自分の考えをはっきり言えない」など、アイデンティティ拡散を示す質問がそれを代表している。

B 高校生から大学生における変化

次に設定したアイデンティティ形成の分析枠をもちいて、まず高校生から大学生の期間の変化を分析することにした。

アイデンティティ形成の分析枠に高校1年から大学3年までの学年をプロットすると、図4のようになる。まず第I軸をみると、「モラトリアム青年」とよばれる現代青年においても、高校生から大学生の期間に、第I軸上を高校3年の時点で moratorium から Identityに移行し、アイデンティティ形成をおこなっている傾向がみられた。また第II軸をみると、やはり高校生から大学生の期間に、第II軸上を大学1年の時点で isolation から intimacyに移行し、相互性を形成する傾向がみられた。

以上のように現代青年は、高校生から大学生の期間に孤立型モラトリアムから自立型アイデンティティをへて、連帯型アイデンティティを形成する傾向がみられ、他のアイデンティティとの相互性をともなうアイデンティティの形成がみられた。

C アイデンティティ形成の規定要因

1 小集団参加

前述のように現代青年には仲間との情緒的な関係を重視する傾向があるが、石井完一郎は小集団依存が、青年を私生活にとじこもらせ、発達と対人関係の形成の阻害要因となることを指摘している²⁹⁾。しかしこの小集団への「巣籠り」への批判にたいして、小此木は女性患者の症例研究のなかで、小集団による支持と是認が青年の発達を支える重要な要因となることを指摘している³⁰⁾。本節ではこの小集団の青年の発達への影響を、小集団内の相互行為が、アイデンティティ形成を阻害するのか、あるいは促進するのかという問題として分析することにした。

アイデンティティ形成の分析枠に、小集団参加(質問は「よくつきあっている仲のよいグループはありますか」)、および参加集団の数をプロットすると、図5のようになる。まず小集団参加についてみると、小集団に参加していない青年は孤立型モラトリアムに、小集団に参加している青年は連帯型アイデンティティにぞくしている。また参加集団の数をみると、参加集団の数が少ない青年は孤立型モラトリアムに、参加集団の数が多き青年は連帯型アイデンティティにぞくしている。そして同様の傾向は高校生・大学生別でもみられ、高校生でも小集団参加者、および参加集団の数が多き者は連帯型アイデンティティにぞくしていた。

以上のように「仲のよいグループ」という小集団への参加は、集団内の他のアイデンティティとの相互性を形成し、またそれがアイデンティティ形成を阻害せずに、

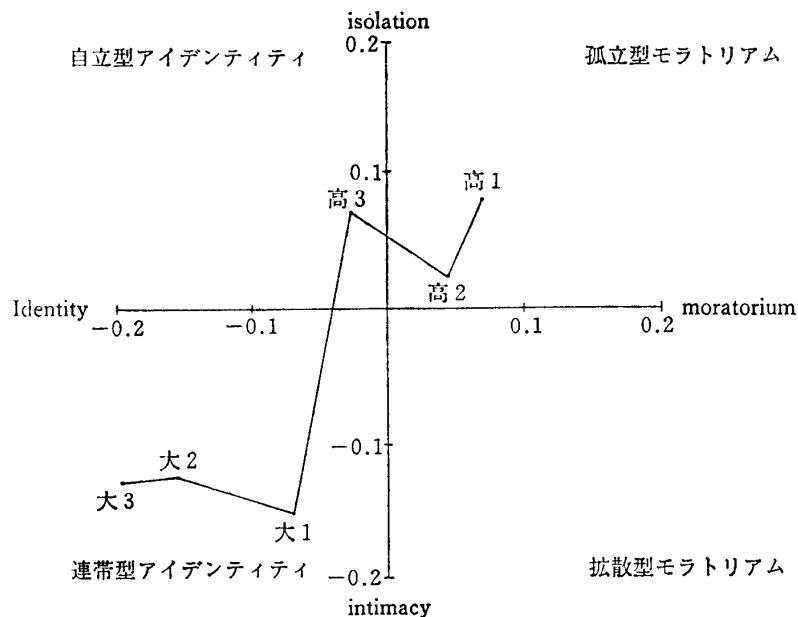


図4 高校生から大学生における変化

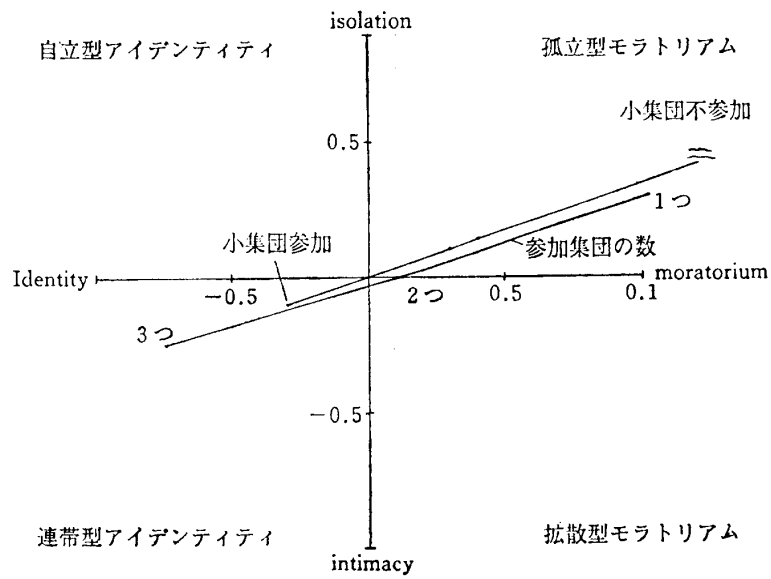


図 5 小集団参加

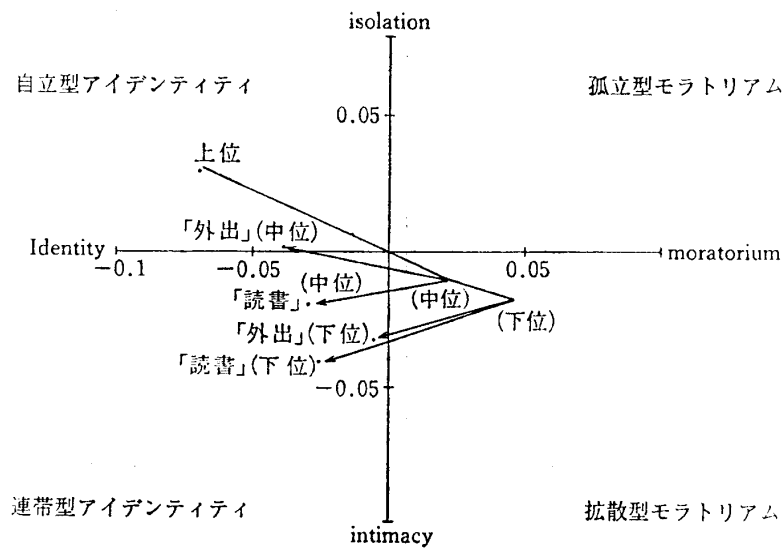


図 6 成績と行動（高校生）

アイデンティティの形成がなされる傾向がみられた。

2 成績と行動（高校生のみ）

生徒文化研究など、高校生を対象とした研究によれば、学校における成績は、生徒の意識や行動に重大な影響をあたえている。そしてこれまでの研究では、主に進路意識や学校内での行動などがとりあげられてきたが、青年期にある生徒にとってアイデンティティ形成は重要な問題であり、成績はアイデンティティ形成にも重大な影響をあたえている、と考えられる。またエリクソンは、アイデンティティ形成における他者からの認知の重要性を指摘しているが³¹⁾、特に『若者文化』調査の対象となった高校は大学進学希望者が多い（平均80.7%）進学校で

あり、成績上位者は教師や友人からの認知がたかくてアイデンティティが形成しやすく、それにたいして成績下位者は認知がひくく、アイデンティティが形成しにくいことが予想される。

この点について自己評価された成績をアイデンティティ形成の分析枠にプロットすると、図6のようになる。図6のように、成績上位者は自立型アイデンティティに、成績中位者、成績下位者は拡散型モラトリアムにぞくしている。

このように、成績上位者はアイデンティティが形成されているのにたいし、成績中位者、成績下位者は、アイデンティティ拡散におちいっていることが示されてい

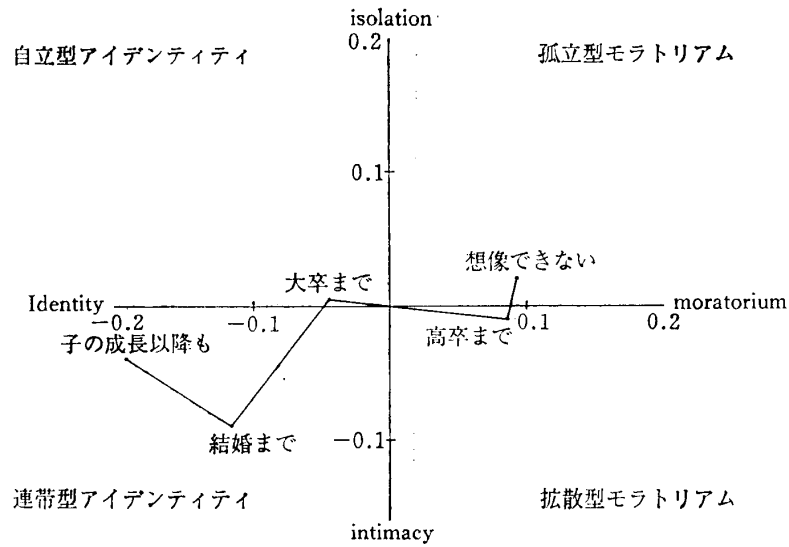


図7 アイデンティティ形成と時間的展望(高校生)

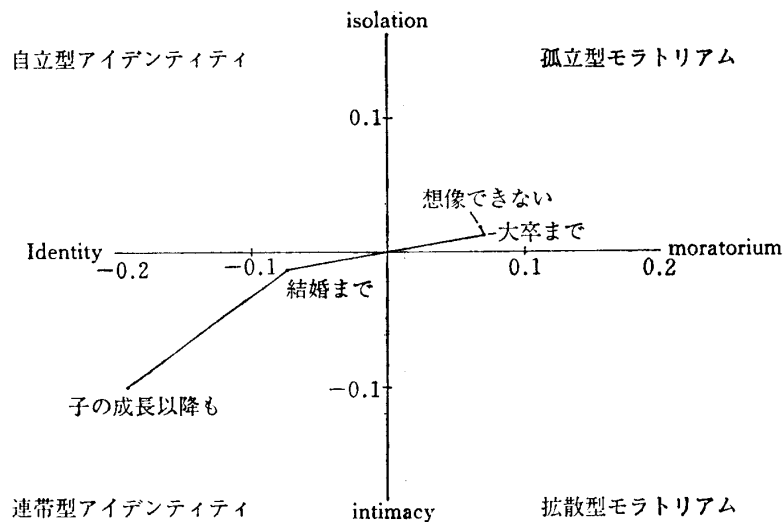


図8 アイデンティティ形成と時間的展望(大学生)

る。

またこの成績に、日常生活での行動も加えてプロットすると、図6のようになる。図のように、成績中位者、成績下位者でも、ふだんの日に1時間以上「読書」「友人との外出」などをおこなっている青年は、自立型アイデンティティ、連帯型アイデンティティにぞくしている。このように他者からの認知がひくい成績中位者、成績下位者においても、それ以外の活動によってはアイデンティティが形成される可能性があることも示されている。

D アイデンティティ形成と時間的展望

エリクソンはアイデンティティ形成の病理誌的研究のなかで、「時間的展望の拡散」をとりあげている。そして青年期が極端に延長された場合に「時間体験」に障害が

おき、人生は青年期が終ると同時に終了する、という考えにとりつかれる例を示している³²⁾。このエリクソンが示した例は病理例だが、一般に現代の青年は「現在中心」型といわれ、たとえばNHKの調査においても、目標を未来に設定するよりも、現在の欲求充足を重視する傾向が示されている³³⁾。したがって本節は、アイデンティティ形成と時間的展望の関係について、分析することにした。

まず高校生について、時間的展望(質問は「自分の将来を、どこまで想像できるか」)をアイデンティティ形成の分析枠にプロットすると、図7のようになる。図のように、モラトリウムにぞくする青年は、「将来は想像できない」「高校卒業まで想像できる」など時間的展望が短いのにたいし、連帯型アイデンティティにぞくする青年は

「結婚まで想像できる」「子どもの成長以降も想像できる」など、時間的展望が長くなっている。

また大学生についても、時間的展望をアイデンティティ形成の分析枠にプロットすると、図8のようになる。図のように、やはりモラトリアムにぞくする青年は時間的展望が短いのにたいし、連帯型アイデンティティにぞくする青年は、時間的展望が長くなっている。

以上のように、アイデンティティ形成は青年の時間的展望に影響をあたえており、相互性をともなうアイデンティティ形成がなされている青年ほど、時間的展望が長いことが示されている。

まとめと今後の課題

本稿では現代青年のアイデンティティ形成を分析するため、エリクソンの発達図式を批判的に検討した。そして引き延ばされた青年期における相互性の重要性を指摘し、発達の第5段階の青年期 (adolescence) の Identity-moratorium と、第6段階の初期成人期 (young adult) の Identity-isolation を直交させてアイデンティティ形成の分析枠を作製し、孤立型モラトリアム、自立型アイデンティティ、連帯型アイデンティティ、拡散型モラトリアムの四類型をえた。そして調査をもとに実際にアイデンティティ形成の分析枠を設定し、①高校生から大学生の期間に、moratorium から Identity へ、isolation から intimacyへ移行し、連帯型アイデンティティを形成する傾向があること、②小集団参加、成績と日常の行動 (高校生のみ) がアイデンティティ形成の規定要因となっていること、③アイデンティティ形成が、時間的展望に影響をあたえていること、を示した。

それでは最後に、今後の課題を記しておくことにしたい。

その第一は、現代社会との関係である。もともとアイデンティティは心理社会的に形成されるが、本稿はアイデンティティ形成の分析枠の作製を中心とし、その現代社会との関係づけが不十分であった。しかし「人間相互間のゲーム」を原理とする脱産業社会は、多様な人間関係と自己表現が保障される一方で、学校や地域での管理や疎外も問題となっている。したがってそのような社会における、アイデンティティ形成とそれを保障する相互性のあり方が、今後の青年の分析において重要となる。

また第二は、アイデンティティ形成の分析枠の、さまざまな対象への適用である。本稿では一般の高校生、大学生を対象に分析をおこなったが、この分析枠は、非行青

年、社会参加青年など、さまざまな対象へ適用することができる。特に私生活主義が広がっているなかで「社会参加」をおこなっている青年が、活動のなかでどのように他者との相互性を形成し、アイデンティティを形成していくか、などの分析に有効となる。

(指導教官 天野郁夫)

注・引用文献

- 1) 清水将之『青い鳥症候群』弘文社, 1983.
- 2) Kiley, D. "The Peter Pan Syndrome" Dodd, Mead & Company, New York, 1983.
- 3) 栗原 彬『やさしさのゆくえ = 現代青年論』筑摩書房, 1981.
- 4) 引き延ばされた青年期, 仲間との情緒的な関係の重視など, いわゆる「モラトリアム青年」の出現は「青年の異議申立て」以降なので, 本稿では「現代青年」を, 1970年以降の青年とする。
- 5) 二関隆美, 1975, 青年文化の問題, 大阪大学人間科学部紀要, 第1巻, p. 213.
- 6) Keniston, K. "Youth and Dissent" Harcourt Brace Jovanovich, Inc., 1977.
- 7) Matza, D. Position and Behavior Patterns of Youth Faris, R.E.L. (ed.) "Handbook of Modern Sociology" Rand McNally, Chicago, 1964, p. 192.
- 8) 松原治郎『日本の青少年』東京書籍, 1978, pp. 24-25.
- 9) 二関, 前掲論文 (1975), pp. 230-231.
- 10) NHK『日本人の意識』調査, 1983.
- 11) 小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』中央公論社, 1981, pp. 24-30.
- 12) Erikson, E.H. "Identity" W.W. Norton & Company, Inc., New York, 1968, 岩瀬庸理訳『アイデンティティ』金沢文庫, 1973.
- 13) 中西信男・水野正憲・古市裕一・佐方哲彦『アイデンティティの心理』有斐閣, 1985, p. 2.
- 14) 山崎正和『柔らかい個人主義の誕生』中央公論社, 1984.
- 15) エリクソン, 前掲訳書 (1973), p. 5.
- 16) Keniston, K. "Young Radicals" Harcourt, Brace & World Inc., New York, 1968.
- 17) Lifton, R.J. "Boundaries, Psychological man in Revolution" Deborah Rogers Ltd, 1967.
- 18) 無藤清子, 1979, 「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性, 教育心理学研究, 第27巻, 第3号, pp. 28-37 など。
- 19) 岡本祐子, 1985, 中年期の自我同一性に関する研究, 教育心理学研究, 第33巻, 第4号, pp. 23-34 など。
- 20) エリクソン, 前掲訳書 (1973), pp. 178-187.
- 21) 片瀬一男, 1983, E. H. エリクソンにおける二次的社会化への視点, 社会学評論, 135, pp. 2-17.
- 22) 柳沢昌一, 1985, E. H. エリクソンの心理社会的発達理論における「世代のサイクル」の視点, 教育学研究, 第52巻, 第4号, pp. 396-406.
- 23) Erikson, E. H. "Identity and the Life Cycle" International Universities Press, Inc., New York, 1959. 小此木啓吾訳『自我同一性』誠信書房, 1973, p. 119.
- 24) Evans, R.I. "Dialogue with Erik Erikson" Harper & Row, Publishers, Inc., 1967 岡堂他訳『エリクソンは語る』新曜社, p. 60.
- 25) 「連帯」という言葉については, 次の文献を参照。エリクソン, 前掲訳書 (1973), p. 158.

- 26) 同上, pp. 164-165.
- 27) 詳しくは, 以下の文献を参照。高校教育研究会(代表 深谷昌志)『モノグラフ・高校生 '87 vol. 21 若者文化』福武書店, 1987.
- 28) なお『若者文化』調査における質問は, 行動にかんする質問が多く, 意識にかんする質問が少ない, という問題がある。この点については今後, 心理学の尺度なども導入し, 改善していくことにしたい。
- 29) 石井完一郎・笠原 嘉編『現代のエスプリ No. 168 ステューデント・アパシー』至文堂, 1981, p. 225.
- 30) 小此木啓吾, 青年期精神療法の基本問題, 笠原他編『青年の精神病理1』弘文堂, 1976, pp. 259-261.
- 31) エリクソン, 前掲訳書(1973), pp. 23-31.
- 32) 同上, pp. 167-168.
- 33) NHK, 前掲調査。